

近代「日本語」と聖書翻訳について

邢鎮義*

目次

1. はじめに
 1. 1 問題提起
 1. 2 研究方法と先行研究
 2. 聖書の日本語訳と「日本語の日本語」の構想
 2. 1 「明治元訳」
 2. 2 「大正改訳」
 2. 3 「口語訳」
 3. 聖書翻訳による「日本語」の変遷
 3. 1 神
 3. 2 愛
 4. おわりに
-

1. はじめに

1. 1 問題提起

聖書がそれぞれの民族語で翻訳されるのは、よく知られているようにルター(新約1522年、旧約1534年)による翻訳がその始まりである。そしてこの聖書翻訳がゲーテなどに影響を与えてドイツ文学の土台となり、ドイツ語の近代化につながったのも、知られているとおりである。このことは聖書のドイツ語翻訳に限らず、近代におけるそれぞれの国家語形成において同様のことがいえるだろう。

* 又松大学校日本学科 招聘教授 日本語学・社会言語学

日本における聖書翻訳は、部分訳ではあるものの、1549年、フランシスコ・ザビエルによる翻訳がその始まりとされている。その後1837年、シンガポールで刊行されたギュツラフ (Guützlaff) による「約翰福音之伝」と、1855年、香港で刊行されたベテルハイム (B.J.Bettellheim)による「路加伝福音書」、「約翰福音之伝」、「聖差言行伝」などが海外翻訳として知られており、1859年、日本の開国後は、ブラウン (S.R.Brown)による「馬太伝福音書」(1863年)、ゴープル (J.Goble)による四福音書(1871年)、ヘボンとブラウンによる「新約聖書馬可伝」、「新約聖書約翰伝」(1872年)など、個人による聖書翻訳が日本にて刊行され、これらを「国内訳」としている。そして1872年、日本で初めて「聖書翻訳委員会」が組織されて、本格的な聖書の日本語訳が行われ、1880年、いわゆる「明治元訳」として完成する。

この翻訳委員会に最初の翻訳委員として加わったグリーンは、聖書の日本語訳にあたり「日本語を以て日本文に訳せざる可らず。漢文体も不可。英訳体も不可なり」²⁾と主張する。そしてブラウンは日本人助役が漢文体を主張するのに対し「元来中国や日本では書物は学者の読むものとされている。しかし神の言葉である聖書は学者だけのものではない。どんな日本人にも自由に読めるようにするべきである」³⁾という意見を出している。しかしこの当時、宣教師たちがイメージする「どんな日本人にも自由に読める日本語、日本文」は存在しておらず、近代における「日本語」、「日本文」はここからスタートするといえる。

本稿では、初期宣教師たちがイメージした「日本語の日本文」⁴⁾が、聖書翻訳の各時代においてどのように構想され、今日の「日本語の日本文」になっていくのか考察したい。つまりそれは「日本語」の近代化の過程と重なる出来事として、聖書翻訳の進行過程と、近代語としての「日本語の日本文」の成立の過程をみることによって、互いにどのような関わりを持つかが見えてくると思うので、その点について考察したいのである。

1. 2 研究方法と先行研究

研究方法としては、日本の聖書翻訳においてもっとも広く影響を与えたとされる「明治元訳」(1880年)、「大正改訳」(1917年)、「口語訳」(1955年)を中心に、主に文体と語彙に焦点をあてて考察する。この三つの翻訳バージョンは聖書翻訳としても重要視されるが、この翻訳が行われた時期は、社会的にも大きな変革期である。「明治元

2) 松山高吉「聖書和訳について」(1926)『植村正久と其の時代』第四巻所収

3) 杉本つとむ『日本英語文化史の研究』362頁

4) 「日本語の日本文」というのは、注2)のグリーンの言及によるもので、今日感覚からすると同語反復のように見えるが、こういう表現から近代「日本語」が成立する以前の状況が伺えるところである。

訳」が行われた時期は、明治維新以降、「文明開花」への関心が高まった時期で、言語においてももっとも混乱する時期であった。そして「大正改訳」が行われた時期は、日本が清、口との戦争に勝利をおさめ、国家主義が最高潮に達しており、また義務教育が軌道に乗る時期で、とくに国定教科書を通して「国語」の姿が具体化されつつあった時期である。最後に「口語訳」は、敗戦によってさまざまな分野において社会改革が行われる時期である。「日本語」に関しても当用漢字表による漢字制限と、歴史仮名遣を廃止し、表音仮名遣に基づく現代かなづかいが、全面的に実施される時期で、明治以降の近代日本におけるもっとも大きな社会変革期ともいえる。つまりこの三つの聖書翻訳は社会的にも言語的にも近代日本における重要な節目と重なるのである。そこで本稿では、このような社会変革に聖書翻訳はどのようなスタンスを取ったのか、聖書翻訳における「日本語の日本語」は、どのように構想されるのか、それを時期別に考察してみたい。

先行研究としては、日本における聖書翻訳史の研究として海老沢有道（1981）、門脇清・大柴恒（1983）などがあり、聖書翻訳と日本語の研究として藤原藤男（1974）、鈴木範久（2006）がある。また、対照言語学の観点からの研究として、テキストとしての聖書翻訳を考察した安増煥の（2005、2008）などがある。本稿はこれらの研究を大いに参考にしながら、それぞれの翻訳時期において聖書の言葉として構想された「日本語の日本語」は、如何なるものであったかについて考えてみたい。そして聖書の日本語訳の「日本語の日本語」と、それぞれの時期における「日本語の日本語」との関係を通して、互いにどのように影響し合っていたのかを論じてみたい。

2. 聖書の日本語訳と「日本語の日本語」の構想

2.1 「明治元訳」

日本における最初の聖書翻訳委員会は、1872年、ヘボン、D・C・グリーン、S・R・ブラウンらが中心となり、奥野昌綱、松山高吉、高橋五郎らが日本人助役者として加わって組織された。そして1874年3月25日、初会合を開き、聖書の日本語訳に取り掛かり、1880年、新約聖書が完訳され、1885年『新約全書』としてまとめられる。これがいわゆる「明治元訳」である。

この翻訳において既述の「日本語をもって日本語に訳す」、または「どんな日本人にも自由に読める日本語」が構想されたが、当時は明治維新以降、「文明開化」がキーワードだった時代で、日本社会のあらゆる分野において、文明開化のための様々な提言がなされた。その中で言語問題に関しては、前島密、福沢諭吉、西周などの知識人による漢字の廃止または削減、仮名やローマ字採用などの主張が繰り広げられた。前島密は

慶応二年(1866年)、徳川慶喜に上申した建白書に、「漢字御廃止之儀」と題し、将来国民教育を普及させ学問を進捗させて、日本を文明に導くには、学習上、日常私用の文章上で、漢字を全廃して簡易な仮名文字を用いるべきであると主張した。また、西周は「洋字ヲ以テ国語ヲ書スルノ論」を『明六雑誌』(1874年3月号)に発表し、西洋文明の摂取のために、「ローマ字を以て和語を書す」、いわゆる「ローマ字国字論」を説いた。これに対し清水卯三郎は、同じ『明六雑誌』(1874年5月号)にカナ、特に天下に通用性の多い平仮名の専用を主張する「平仮名ノ説」を発表する。この他にも、森有礼の「日本語廃止論・英語採用論」(1873年)、「かなの会」(1883年)、「ローマ字会」(1885年)の設立など、近代日本における国語国字問題においてもっとも混乱する時代であった。

このような言語状況の中、翻訳委員会は次のような翻訳方針を定め、翻訳に取り掛かる。

- I. 会合が成立して、ものごとを取り決めるための定数を3人とすること。
- II. 議論がわかれたときは多数決とすること。
- III. テキストとなる原典として *Textus Receptus* を用いること。
- IV. 会合は月、水、木、金曜日の午後2時—5時に開くこと。

この方針には当時の翻訳委員会が、聖書の日本語訳に際し、翻訳の手続きと原典の問題にもっとも重点をおいていたことがうかがえる⁵⁾。つまりこの時点において、文体、翻訳用語など、言語のことはそれほど重要視されなかった。しかし既述の「どんな日本人にも自由に読める日本語の日本語」という構想は、この「明治元訳」において出されたもので、それなりの苦悩はあったといえるだろう。そこで完成したのが以下の訳文である。

おほく み のほ ぎ たま でし たち そのもと きた ぐち ひらき かれら

「イエス許多の人を見て山に登り坐し給ひければ弟子等も其下に来れり、イエス口を啓て彼等に
 おし いひ ころ まし もの さいゆ てんごく そのひと もの なり がらむ もの きゆり そのひと なぐさめ
 教へ曰けるは、心の貧き者は福なり天国は其人の有なれば也、哀む者は福なり其人は安慰を
 う なり にうわ もの きゆり そのひと ち つく う なり うさはく ぎ したふもの
 得べければ也、柔和なる者は福なり其人は地を嗣ことを得べければ也、饑渴ごとく義を慕者は
 さいゆ そのひと あく う なり
 福なり其人は飽ことを得べければ也 (略) 」 (マタイ5:1—6)

文体は、和文体に基づいた和漢混淆文といえる。1880年発表したこのような文体に対し1882年1月16日付『六合雑誌』には、「和文新約全書ヲ見ルニ或ハ国学ニ僻シ或ハ俚

5) この方針には、『*Textus Receptus*』を原典とするとされているが、日本人助訳者たちは、主に漢訳聖書を用いた。とりわけキリスト教用語の訳語は、漢訳聖書の影響が大きいと言われている。門脇清・大柴恒(1983)、土岐健治(1993)、鈴木範久(2006)などを参照されたい。

俗野卑ニ流レル所モアリテ未ダ充分ナル地位ニ達セザレドモ今の体裁を維持して改良に改良を加ヘナバ宜シカラシ。是実に己れの解するを名文と見做し解セザルヲ不都合ト臆断スル外国人ガ不用意ノ攻名ト謂フベシ」という文が掲載された。「明治元訳」の文体が日本文の文体に可能性を見いだせたことは評価しながらも「不用意の攻名」であると評価しているのである。さらに植村正久は「明治元訳」について「現行の日本聖書には傍訓と漢字とが奇妙に異ったのが沢山。是は傍訓になって居る日本語では足らず、其れを漢字で補ひ、漢字で足らぬ所を傍訓で補ふと云ふ工夫で、寇かも左足の跛と右足跛の二人合くち ひらきわせて一人前の仕事をさせる様なものだ」⁶⁾と批判している。たとえば「口を啓て」のような例を含め、漢字が極度に多く、それに一々振り仮名が付けられ、振り仮名がないと読みづらいことへの批判である。

しかし「明治元訳」が出された当時は、既述したような言語状況のなか、それぞれの主義主張による文体が乱立していた時期で、このような文体は「明治元訳」独特のものとは言えない。たとえばこの時期多く出された翻訳小説に、このような文体は確認できる。次は「明治元訳」とほぼ同時期、日本で翻訳された『天路歷程意識』（1881年）の訳文である⁷⁾。

われこのよ あらの ゆき ふ と あな そこ ふ おむ ゆめ
 そのゆめ ひとり やぶれ きもの あるところ た かほ いへ そむ ほか みやりて ほん と
 其夢に一人の人破瀾た衣をきて一所に立ちその面は家を転けて他のところを見手には書物を執
せなか おもい おほ
 り背上には大任を負へり、、、、（略）」

『天路歷程』は、聖書について世界で多くの国の言葉に翻訳され読まれた書物である。同じ翻訳物とはいえ、聖書とはその位置づけが異なるが、『天路歷程』もキリスト教思想に基づいており、初期宣教の際に宣教の目的で、聖書とほぼ同時期に翻訳されたもので、当時の文体を理解するには、参考になる資料であると思う⁸⁾。

この『天路歷程』の文体も「明治元訳」の文体とほぼ似ている。さらに漢文に基づきながら、カナで補う手法も、両方とも似ている。ただ、「明治元訳」の方は、句読点を入れてさらに読みやすく工夫したところに注意したい。句読点は、日本伝統の文章にはなかつ

6) 『植村正久と其の時代 四』232頁
 7) 日本における『天路歷程』の翻訳は、1876年4月から66回にわたって「七一雑報」に連載されたのが、その始まりである。そして1881年、単行本として『天路歷程意識』が刊行される。
 8) ちなみに朝鮮語においても、イギリス系カナダ人宣教師ゲール (James Scarth Gale) によって1894年、翻訳された『天路歷程』は、朝鮮における翻訳文学の嚆矢となり、近代文体形成に大きな役割を果たした。(1948年、大韓民国建国以前の言語状況を指しているため、あえて「朝鮮語」、「朝鮮」にする。)

たもので、明治以降、西洋文章の影響で、合理的な近代文体の要件として認識されはじめ、明治20年以降、小説や小学校教科書に登場するようになる近代文体要素の一つである（山本[1982：9頁]）。それなのに当時としては真新しい句読点が聖書翻訳に取入れられたのは、画期的なことであったと思われる。そしてこれはおそらく宣教師たちの意見であり、「だれでも読める日本語の日本語」のための工夫であったといえるだろう。

「明治元訳」が行われた1880年前後のこの時期は、近代文体である言文一致体の発生期に当たる時期として、文体に関する規範や議論はほとんどなされず、言文一致体に多大な影響を及ぼす文学作品の翻訳も、明治20年代以降多く見られるようになる。従って「不用意の攻名」として批判された「明治元訳」だが、近代文体へ向けた「日本語の日本語」の先駆的な作業であったと評価できよう。

2.2 「大正改訳」

「不用意の攻名」であった「明治元訳」は、完成後すぐに改訳の意見が出された。1910年「改訳委員会」が組織され、改訳に取り掛かり、1917年2月「大正改訳」が完成される。しかし一つ注意したいのは、これはあくまでも「改訳」であったということである。これは「明治元訳」に対する批判はあったが、「大正改訳」はキリスト教用語の訳語など「明治元訳」の土台の上に成り立っていることの反証であり、日本の聖書翻訳における「明治元訳」の陰の裏返しでもある。

この「大正改訳」の最も大きな特徴は、日本人が助役ではなく正規のメンバーとして加わった点である⁹⁾。1906年5月10日付『福音新報』によると、「日本人に学者少なからざる今日に於ては改訳は之を邦人の手に於てなさるべく若し要ありとすれば外国宣教師は之が補助たらんとの意を語る」と記されている。つまり「明治元訳」が宣教師主導のもと行われたのに対し、「大正改訳」は日本人主導のもと、宣教師が助役として行われた。当然のことながらこのことは翻訳文にも大きな影響を及ぼす。まず、日本人主導の改訳委員会の改訳方針をみたい。

改訳方針

- 一、文体ハ平易通俗ニシテ口語ニ近カラシムル事
- 二、用語ハ新旧ヲ問ハズ広く通ジ易キヲ取り而モ卑シカラヌ者ヲ採ブ事
漢字タリトモ一般ニ知ラレタル者ニシテ卑シカラズ稜々シカラヌハ用キ
テ可ナルベシ邦語
- 三、文章、措辞ハ勉メテ普通平易ヲ取り佶屈贅牙ヲ避クト雖モ鄙俗ニ陥ラズ

9) とは言ってもグリーン、フォス、デビソン、ハーリントンの四人の宣教師に、藤井重一、松山高吉、別所梅之助、川添万寿得の四人の日本人が加わり、委員長はグリーンであったため、日本人主導というのには無理があるかも知れないが、「明治元訳」と比べ、日本人の役割が大きくなったのは事実であり、訳文にもその痕跡が著しいため、便宜上本稿では「主導」としたい。

- 正雅ヲ失ハズシテ莊嚴ヲ保ツ事
- 四、神及び基督ニハ敬語ヲ用キ其他モ詞遣ニ意ヲ用キテ自ラ尊卑正邪ヲ一読シテ見ル者聞ク者ニ弁ヘシムル事
 - 五、かれ、なんぢ等ノ代名詞ハナルベク省略シ殊ニ至尊ニ対シテハ之ニ代ルニ別ニ敬意ヲ失ハザル語ヲ用キル事
 - 六、語訳ニアラズシテ翻訳タルベク日本語ノ他国文ナラズシテ日本語ノ日本文タルベキ事
 - 七、地ノ文ト対話ノ詞ト引用句トヲ区別シ且ツ讚辞歌詞ハ其体ヲ存ジテ其趣ヲアラハス事
 - 八、同一ノ原稿ハ止ムヲ得ザル場合ノ他ハ訳語ヲ同一ニスル事
 - 九、挿入スル漢字ハ世間流布ノ者ヲ用キテ字画ノ少ナキ方ヲ取り且ツ邦語ノ意ヲ助ケテ明カナラシムルト仮名ノ贅長ヲ短縮スルトニ用キ妄リニ故ナク漢字ヲ臚列セザル事
 - 十、文法、語格、仮字遣、漢字音ニ至ルマデ正確ニスル事

以上の基本方針から、次の二点に注目したい。第一は、「平易、通俗、口語、普通、世間流布」など、近代国民国家における言語問題がもつとも注目するキーワードに、聖書翻訳も注目したことである。この時期（1900年～1910年）は近代国民国家における「国語」改良が進められる最中であり、「国語」つまり「日本語」に対する意識が高まって、「国語」の実体として言文一致体の確立や漢字の制限などが最大関心事となっていた。とりわけ1904年に始まった第一期国定教科書が「文章ハ口語ヲ多ク」という方針のもと、文章を全面的に口語文にしたことで、社会全般に口語文体が確立しつつあった。しかし実際「大正改訳」の訳文は、基本方針とは裏腹に、文語体となった。この文体のことに關しては「文体は最初言文一致体と云ふ説もあつたけれども其は否決して成るべく口語に近い文体を用ゐる事にした、其れ故權威を以て云ふ場合の外は「勿れ」と云ふ語は用ゐておらぬ、こんな風の改訳は漢学の方からは非難があるかも知れぬ」（別所[1910]）などの記述から、平易・通俗の言文一致体にするか、「權威」ある文体とされる文語体にするかで、議論があったことがうかがえる。しかし結果的には宗教的權威や莊嚴さが優先され、文語体を取りながら「明日のことを思ひ煩ふな（マタイ6:34）」に見られるように禁止を表す表現に、口語体に見られる「な」が採用されるなど、「口語に近い」文語体の「文語訳」が完成した。

そして第二は、代名詞、敬語、文法などに注目してみると、「明治元訳」の翻訳方針に比べて、言語そのものに注意を払うようになったことである。その結果、たとえば「明治元訳」の「イエス答て彼らに曰ける」は「大正改訳」では「イエス答へて言ひ給ふ」に、「イエス彼らに答けるは」は、「イエス答へ給ふ」のように、「大正改訳」において「彼ら」が省略され、「給ふ」を用いる方へ改められた。つまり、代名詞が減って敬語が増える結果になったのである。そして完成した訳文は、以下のとおりである。

「イエスい群衆ぐんしゆうヲ見みて、山やまにのぼり、坐ざし給たまへば、弟子でしたち御許みもとにきたる。イエス口くちをひらき、教おしへて言いひたまふ。『幸福さいわひなるかな、心こころの貧まずしき者もの。天国てんごくはその人ひとのものなり。幸福さいわひなるかな、悲かなしむ者もの。その人ひとは慰なぐさめられん。幸福さいわひなるかな、柔和じゆうわなる者もの。その人ひとは地ちを嗣つがん。幸福さいわひなるかな、義ぎに飢うえ渴かつく者もの、その人ひとは飽あくことを得えん。(略)』(マタイ5:1-6)

既述の「明治元訳」の同じ箇所と比べると、まず漢字を少なくし「平易、通俗、普通、世間流布」の文章を目指したことが分かる。これは表記として「漢字」が減ったという意味で、「大正改訳」において「漢語」は増えている¹⁰⁾。そして句読点を多く入れることで、さらに読みやすい文章にした。山本政秀は近代文体の要件として「平明性、細密性、俗語の尊重、句読法の確立、客観的描写」(山本[1982:5-9頁])を挙げているが、「大正改訳」は、文語訳でありながら、平明性、細密性、句読点の確立は確保したと見てよからう。

文語体、つまり近代以前における文章体というのは、文字通り文章に用いる文体である。かつて文章は貴族の専有物で、それ自体に権威が保障された。一方、「話すとおりに書く」という理念に基づく口語体、つまり言文一致体は、近代において新しく登場する文体で、一般的に「近代文体」と言われる。それは口語体が近代社会にふさわしい文体であるためである。近代にふさわしい文体というのは、社会構成員すべてに意思疎通可能な文体でなければならない。そのため、話し言葉に基づいてだれにでも習得が容易で、分かりやすい文体をつくったわけだが、それは権威あるとされる文語体とは大きく異なるもので、口語体は軽薄で気品がないと批判された。もちろんこれは主観的判断に基づいたものだが、なによりも「権威」と「荘厳さ」が求められる聖書においては、軽薄で品がないとされる口語体に翻訳することは、当時としては到底許されることではなかっただろう。そこで折衷として文語訳にしながら、漢字を少なくし、句読点を多く入れて、なるべく読みやすくしたのである。文語訳になった経緯については、既述した「文体は最初言文一致体と云ふ説もあつたけれども其は否決して成るべく口語に近い文体を用ゐる事にした」という記述以外に議論はほとんど見当たらないので、詳細は分からないが、おそらく文体に関しては、あまり議論される余地もなかったのではないか。この時期なお、標準語も書記法(仮名遣)も定まらない中、聖書翻訳においては、このような文体が「日本語の日本文」として構想されたのである。

この「大正改訳」は、植村正久の「若し聖書の改訳に於て日本文の標準となるべきものが出来たなら、我邦の文学界に及ぼす影響は実に大いなるものであろう」などの評価からも分かるように、日本における聖書翻訳の歴史の中で、文学的価値からみて「名訳」と

10) このことに関しては、安(2008)を参照されたい。

いわれ、さらには聖書の日本語訳の「古典」ともいわれている。

2.3 「口語訳」

戦後教育における現代仮名遣と当用漢字表の実施により、口語訳に取り掛かるようになる。学校教育で教えらるる文体と異なる聖書を用いては「民衆の書」として聖書の存在意義に反するとの理由である。そこで行われた口語訳は基本方針「現行訳（大正改訳：筆者注）をそのまま現代仮名遣いと当用漢字とで書き改める」¹¹⁾に見られるように全面的な改訳というより、「大正改訳」の文語訳を現代仮名遣や当用漢字表に基づいて書き改めたものである。そして一つ注意したいのは、松本卓夫、高橋虔、山谷省吾という三人の翻訳委員に、「国語」専門家として関根文之助が加わったことである。聖書を宗教書籍としてだけでなく、テキストとして認識するようになったことであろう。その訳文は以下のとおりである。

イエスはこの群衆を見て、山に登り、座につかれると、弟子たちがみもとに近寄ってきた。そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて言われた。
 こころの貧しい人たちはさいわいである。天国は彼らのものである。
 悲しんでいる人たちはさいわいである。彼らは慰められるだろう。
 柔和な人たちはさいわいである。彼らは地を受けつぐであろう。
 義に飢えかわいている人たちはさいわいである。彼らは飽き足りるようになるであろう。(略)

これは現代仮名遣と当用漢字表に基づいているため、ほぼ発音どおりの表記になっており、漢字も明らかに少なくなっている。そして引用文の「座につかれると」、「言われた」にみられるように「口語訳」で敬語は、すべて「れる、られる」に統一される。現代仮名遣、当用漢字表は当時「国語民主化」として呼ばれ、日本全国でマスコミ、教育、行政すべての領域において、一斉に押し進められた政策で、今日まで続いている。そして敬語も、戦前の高潮した国家主義への反省のごとく一斉に整備された。文部省は敬語簡素化の指針として、1952年『これからの敬語』を出し、それまでの敬語は旧時代に発達したままで、必要以上に煩雑であるため、その行きすぎをいましめ、誤用を正し、なるべく平明・簡素にするという方針を打ち出し、「お～になる」、「おっしゃる」などは「れる、られる」にすることを勧める¹²⁾。

この方針の影響だと思うが「口語訳」では、上下親疎に関わらず「れる、られる」で

11) 門脇清・大柴恒 『日本語聖書翻訳史』 228頁

12) 文部省『これからの敬語』10頁

統一されるのである。しかし「口語訳」の「れる、られる」一辺倒の敬語は、1978年刊行された『新約聖書 共同訳』では、「れる、られる」に加えて、「口語訳」時代は、必要以上に煩雑であるため用いない方がよいとされた「お～になる」も登場するようになる。たとえば次のような例である。

- ・「あなたがわたしをつかわされたことを、信じさせるためであります。」
(口語訳) (ヨハネ11:42)
- ・「あなたがわたしをお遣わしになったことを、彼らに信じさせるためです。」
(共同訳)

「日本語」における敬語は、単なる言語領域を越えて、日本精神として語られ、敬語の使い方、あるいは敬語の強化、または簡素化の論理は、時代精神、または時代のながれに大きく影響された¹³⁾。聖書翻訳は一定期間の間隔で行われ、なお個人ではなくいわゆる専門家集団と言われる「翻訳委員会」によって行われるため、該当言語の変化様相をみる客観的な資料になる(安[2005:6頁])とすると、聖書の日本語訳に表れる敬語の使い方を通して、それぞれの翻訳期における「日本語の日本語」に対する構想を伺うことも可能であろう。つまり宣教師主導の「明治元訳」ではほとんど見られなかった敬語が、日本人が主導権を握って行った「大正改訳」では強化され、敗戦後アメリカ主導の「国語民主化」の波の中で行われた「口語訳」では、思いきった「敬語の簡素化」に傾き、およそ30年後行われた「共同訳」では、再び強化される傾向を見せるのである。

なお、語彙に関しては、鈴木範久は聖書翻訳におけるキーワードとして、次の30語を挙げていますが、それを基に「明治元訳」と「大正改訳」と「口語訳」を比較してみると、以下のとおりである。

明治元訳	大正改訳
あい、あくま、あんそくにち、いほうじん、えいこう、かみ、メツ	あい、あくま、あんそくにち、いほうじん、えいこう、かみ、メシ
シヤ、けうくわい、(いあふたか) 悔改、キリストエアン、さいし、祭司、	ヤ、けうくわい、(いあふたか) 教会、悔改、キリストエアン、さいし、祭司、
しと、せいしよ、せいと、せいれい、のぶ、	しと、せいしよ、せいと、せいれい、せんけう、ぜんのう、
全能、せんのう、えらば、選れし者、バプテスマ、ものをつくりしかみ、造者主、	せんみん、バプテスマ、つくりぬし、てんごく、みつかり、
てんごく、つかり、でんだうしや、パラダイス、	でんだうしや、パラダイス、ハルマゲドン、ふくいん、

13) 近代「日本語」の敬語に関しては、拙著「近代「日本語」における敬語の社会言語学的考察」『日本文化学報』第28輯を参照されたい。

ふくいん よみがへり もくし よげんしや とちり 福音、復活、黙示、予言者、隣	よみがへり もくし よげんしや とちり 復活、黙示、予言者、隣
--	------------------------------------

これを見ると「メシヤ、宣教、選民、造物主、御使、パラダイス、復活」が「大正改訳」によって改められた外は、「明治元訳」の訳語が今日まで受け継がれていることが分かる。ちなみに、その後の口語訳では、現代仮名遣による修正以外は、「復活」が「復活」へ、「隣」が「隣り人」へ改められたのみである。つまりキリスト教用語の訳語に関しては、「明治元訳」がもっとも大きな役割を果たし、「大正改訳」においてほぼ定着したとみてよからう。

「明治元訳」は、日本における初期聖書翻訳として、既述したような問題点が指摘されるが、上の表をみると、語彙の面では「明治元訳」の貢献を認めざるを得ない。さらに上の表の単語はキリスト教用語として「日本語」に訳されたものだが、今日殆んどの単語は宗教的意味を越えて、普通の「日本語」として広く用いられている。つまり聖書翻訳は基督教思想の流入の媒体となると同時に、それらの語彙は近代語としての「日本語」の世界に編入されるのである。そして日本語訳聖書の場合、これらの語彙はほぼ漢訳聖書の影響である。キリスト教の観念性の高い言葉は、このようにしてギリシア・ラテン語から西洋語へ、西洋語から漢語へ、漢語から日本語へと移ってきた。そして言葉の意味の観念性が高いほど、それは具体的な現実の違いを越えて、あらゆる言葉に交換可能になるのである（柳父[1986:13頁]）。

3. 聖書翻訳による「日本語」の変遷

聖書の言葉は観念性の高いことばが多いため、聖書翻訳は単なる書物の翻訳にとどまらず、思想や言語意識に大きな影響を及ぼす。聖書翻訳によって新しくもたらされた言葉もあれば、すでに「日本語」のなかにあった言葉で、キリスト教受容によってその意味内容が拡大される例もある。ここでは後者の例を取り上げて¹⁴⁾、聖書翻訳が「日本語」、「日本文化」、「日本人」の言語意識に与えた影響について考察したい。

3.1 神

「神」は今日では、以下のように定義されている。

14) 前者に関しては、安 (2008) を参照されたい。

・『岩波国語辞典』

人知を越えてすぐれた尊い存在。宗教的信仰の対象としても、威力のすぐれたものとしても考えられている。とくに仏などに対し神道の神。

・『広辞苑』第五版

①人間を超越した、威力をもつ隠れた存在。②日本の神話に登場する人格神。③最高の支配者。天皇。④神社などに奉祀される霊。⑤人間に危害を及ぼし恐れられているもの。⑥キリスト教で宇宙を創造して支配する全知全能の絶対者

『岩波国語辞典』の定義と『広辞苑』の定義に若干の違いはあるものの、「神」は宗教一般の普遍的な存在として、その意味を広く捉えることができるだろう。それでは、従来の「日本語」において「神」はどのように定義されたのか。ヘボンの『和英語林集成』3版（1886年）は、次のように記述している。

KAMI カミ 神(shin)n. The deities of the Shinto religion of whom there are said to be yaoyorosu, eight millions, i.e. innumerable. This word is now used by Christians as the only Japanese equivalent for Deus, and God. Motoori says, as quoted by Hirata in his Commentary on the Kojiki, in explanation of this word, ametsuchi ni moro-moro no kami tachi wo hajimete, so wo matsureru miya ni imasu mi-tama wo moshi; mata hito wa sara ni wa iwazu, tori kedamono kikusa no tagui, umi yama nado, sono hoka nani ni mare, yono tsune narazu, suguretarukoto no arite kashikoki mono wo kami to wa iu nari.

『和英語林集成』は「明治元訳」の翻訳委員でもあったヘボンが編纂した辞書である。従って「神」はキリスト教において「Deus」、「God」の意味であるという記述があるのはそのためであろう。その他の記述は、当時の「日本」における「カミ」に対する伝統的な意識がうかがえる。つまり日本伝統の「カミ」は、神道の教えに基づいた「八百万のカミ」であり、そのカミは普通ではなく、すぐれた賢いものという意味なのである¹⁵⁾。ちなみに大槻文彦の『言海』(1891年)には、以下のように記述している。

かみ (名) 神 (一) 形ナク靈アリ、無上自在ノ通アリテ、或ハ、世ニ禍福ヲモナシ、又人ノ善悪ノ行ニ、加護冥罰ヲモナスモノ。(二) 往代ノ帝王、聖賢、英雄、等ノ死後ノ魂ヲ祀レルモノ。(三) スベテ、人ノ智ニテハ測リ知ラレザルヲ。(四) ナルカミ、イカツチ。雷。

15) 本居宣長の「神」の定義「何にまれ、尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物を迎徹とは云なり」『古事記伝三之巻』、『本居宣長全集』第九巻、筑摩書房 1968年

やはりキリスト教に関する記述がないこと以外は、ヘボンの記述と同じようなとらえ方をしている。これが1918年刊行の『大日本国語辞典』には、次のような記述となる。

かみ (名) 神 (一) 我が国、神武天皇以前におはしし方の称。(二) 冥冥の中に存在して、人智にて量り知られざる事を知り、万物を使役し、人類に禍福を下すと思われる霊能。

(三) 天皇の尊称。(四) 死後に神社などに祀られる霊。(五) 基督教にて宇宙を創造しかつ支配する全知全能の主宰者。上帝。天帝。

ヘボンの『和英語林集成』の記述は、彼自身宣教師であったため除いて、上の二書を比べると、『大日本国語辞典』でキリスト教における「神」が加えられ、それ以降は、この定義が一般的になった。つまり『言海』が出された時期には、まだキリスト教における「神」は、「日本語＝国語」の「神」の世界に入ることができなかったが、「明治元訳」をへて「大正改訳」が出され、キリスト教思想が広がるにつれ、キリスト教における「神」は「日本語」としての地位を獲得することができたのである。

聖書翻訳において「God」の訳語が「神」に定着していく過程に関しては、ここでは論じないが¹⁶⁾、結果的に「God」が「神」に訳されたことで、「日本語」における「カミ」の意味内容は、日本古来の「カミ」より拡大され、日本人の言語意識のなかで普遍性を得るようになったといえる。

3. 2 愛

聖書の日本語訳において「愛」が登場するのは、1880年の「明治元訳」においてである。その以前の個人訳では、ギュツラフによる「約翰福音之伝」(1837年)には「愛」を「メグミ」と訳し、ヘボンの「新訳聖書約翰福伝」は「いつくしみ」と訳している。さらにキリシタン時代の翻訳には「御大切」と訳している。

このような流れのなか、「明治元訳」において「愛」が採用されたのは、漢訳聖書とヘボンの影響であろう。「明治元訳」の際、大きな影響を与えた漢訳聖書は「爾乃我愛乃子」のように「愛」を採用しており、ヘボンもこれの影響だと思われるが、『和英語林集成』において「AI アイ 愛 Love; affection; attachment」と記述している。このような経緯で、「愛」は「Love」と等価になったわけだが、元来の「日本語」の言語意識のなかでは、必ずしもそうではなかったようである。

16) 「God」は初期聖書翻訳では「上帝」、「天主」などに翻訳され、「神」になっていく過程において激しい議論があったが、その議論に関しては柳父(1986)などを参照されたい。

今でこそ愛という言葉は崇高な立派な言葉であるが、それも昔はそうではなく、一種の低い賤しい意味に用いられたものである。尊い意味で云へば愛は上級のものが下級のもを憐れむという義で、君が臣を愛し、親が子を愛すと云ったが、臣から君へ対しては忠、子から親に対しては孝、弟から兄に対しては悌、上長に対しては敬で、愛という言葉は用ゐなかつた。憂国といふことはよくいつたが、愛国とはいはなかつたようだ。(山本[1930])

この記述からすると、かつての「日本語」の世界において「愛」は感情的、肉体的、快楽的な意味として用いられ、崇高な意味として用いられる場合も、上から下へ向かつてのみ使う言葉である。『言海』(1891)でも、「あい(名)愛 愛ヅルコト。イツクシムコト。カハユサ。」としており、やはり上から下へ使う言葉として捉えている。このような意識に基づいて日本語訳聖書の「愛」をみると、かなり破格であるように思われる。

「明治元訳」

- またん こえ いふ わ あいし よろこ ところ もの
 ・又天より声ありて云なんぢは我が愛子わが悦ぶ所の者なりと(マルコ1:11)
 こころ つく せいしん つく つく つく なんぢ かみ あい これ
 ・なんぢ心を尽し精神を尽し思いを尽し力を尽し主なる爾の神を愛すべし是いま
 かしら だいに おのれ こと なんぢ となり あい
 しめの首なり第二もこれに同じ己の如く爾の隣を愛すべし(マルコ12:30~31)

「大正改訳」

- てん こえ い わ いつく こ わ よろこ
 ・かつ天より声出づ「なんぢは我が愛しむ子なり、我なんぢを悦ぶ」
 こころ つく せいしん つく つく つく なんぢ かみ あい
 ・なんぢ心を尽し、精神を尽し、思いを尽し、力を尽して、主なる汝の神を愛す
 だいに これ こと なんぢ となり あい
 べし、第二は是なり「おのれの如く汝の隣を愛すべし」

神がイエスに対して、人間が神に対して、人間が人間に対して同じ「愛」と訳している。これは上の山本の記述や『言海』の定義からすると、当時としては考えられないほどの破格であったに違いない。

キリスト教の教えは、神のもとでは皆、兄弟姉妹であり、皆平等であるといういわば平等思想に基づいている。しかし封建社会から市民社会になったばかりの明治初期において、これは全く新しい思想で、観念性の高い概念の訳語である。ここで既述の柳父(1986)の「言葉の意味の観念性が高いほど、それは具体的な現実の違いを越えて、あらゆる言葉に交換可能になるのである」という記述をもう一度想起すると、もともと日本語の意識の世界においては、卑しい意味として用いられていた「愛」は、新しい思想を伝える媒体になった時、「卑しい」という現実を越えて、「尊い愛」に交換可能になったのである。

しかし「明治元訳」と「大正改訳」を比べてみると、宣教師が主導権を握っていた「明治元訳」の方は、すべての場面に對し「愛」を用いているのに対し、日本人主導で

行われた「大正改訳」では、神がイエスに対して言う場面で「愛」と書いて「いつくしむ」としている。しかしももとの「日本語」の感覚では「いつくしむ」は下から上へは用い^{なんぢ かみ あい}ることの出来ない単語であるため、「主なる汝の神を愛すべし」のように人間が神を愛する^{あい}場面では「いつくしむ」とは訳せず、「明治元訳」にならって「愛」と訳しているのである。つまりこのようにして「日本語」における「愛」は「卑しい」単語から、エロス、アガペー、プラトニックを包括する単語へと、その意味が拡大されたのである。ちなみにその後の「口語訳」では、すべて「愛」と改められる。

4. おわりに

神の言葉である聖書は、民衆の書であるため、最初から話し言葉で書かれた。それが各民族語で翻訳される時も、この理念に基づいて話し言葉で翻訳されるのが普通である。そして、そのことは冒頭にも述べたように、それぞれの民族語（国家語）の形成に多かれ少なかれ影響を与える。具体的に言うと、大きく分けて近代文体と近代語彙へ及ぼす影響である。

聖書の日本語訳にあたって、「だれでも読めるような日本語の日本語」という理念に基づいて翻訳が行われた。近代文体と聖書の日本語訳の場合、以上で述べたように、近代文体の発生期に行われた「明治元訳」は、文体としては「不用意の攻名」と批判されたが、句読点など近代文体の要素を先駆的に採用し、日本語の近代文体への可能性を見出した。「大正改訳」も国定教科書などを通して口語体が社会全般に広がる時期に行われたが、聖書は口語訳ではなく文語訳となった。「だれでも読めるような日本語の日本語」を謳いながら文語体となったのは、当時のお口語体は文章に力がなく、軽薄で気品がないという言語観による結果であろう。

しかし文語体は貴族階級のもので難しく、口語体が民衆のもので易しいというのも一種のイデオロギーで、日本語訳聖書においては、この文語訳が多くの人に愛誦されることで、聖書の日本語として「普遍」の地位を得たと言える。たとえば「明日のことを思い煩うな」、「目より鱗」、「狭き門」などは「大正改訳」による一文で、もちろん文語体だが、何の違和感もなく、民衆の言葉となり、教会を越えて普通の「日本語」として機能を果たしている。その意味において日本語の近代文体の成立と聖書翻訳の関係は、ドイツなど他国の例とは異なるが、それぞれの時代に構想された「日本語の日本語」の文学作品としては評価できよう。

近代語彙に関しては、キリスト教用語に限って考察したが、「明治元訳」において漢訳から翻訳された訳語が多く受け継がれ、「大正改訳」でほぼ定着する。「愛」、「神」、「聖霊」、「福音」など観念性の高い言葉は、聖書翻訳を通して、「日本語」の世界に編入され、さらに「日本語」の意味内容を拡大したのである。

【参考文献】

- 新訳聖書（1880） 翻訳委員社中
 新訳聖書（1917） 聖書改訳委員会
 聖書（口語訳）（1955） 日本聖書協会
 安増煥（2005）「성경번역에서 본 한국어와 일본어(1)」『日本文化学報』
 第27輯 韓国日本文化学会 6頁
 （2008）「통시적 자료가 되는 한국과 일본의 성서」『日本文化学報』
 第36輯 韓国日本文化学会
 上田万年（1918）『大日本国語辞典』富山房
 海老澤有道（1981）『日本の聖書—聖書和訳の歴史』日本基督教団出版局
 大野晋、大久保正編集校訂（1968）「古事記伝三之巻」『本居宣長全集』第九卷
 筑摩書房
 大槻文彦（1891）『言海』
 門脇清・大柴恒（1983）『日本語聖書翻訳史』 新教出版社 228頁
 佐波亘編（1938）『植村正久と其の時代 四』 232頁
 新村出編（1994）『広辞苑』第四版 岩波書店
 鈴木範久（2006）『聖書の日本語』岩波書店
 西尾実、岩淵悦太郎、水谷静夫編（1997）『岩波国語辞典』岩波書店
 藤原藤男（1974）『聖書の和訳と文体』 キリスト新聞社
 ヘボン（1886）『和英語林集成』丸善商社
 別所梅之助（1910）「聖書改訳事業の進捗」『護教』
 文部省（1952）『これからの敬語』10頁
 柳父章（1986）『ゴッドと上帝』筑摩書房 13頁
 山本秀煌（1930）「伝導の草分」『日本伝導 めぐみのあと』アルバ社書店
 山本政秀（1978）『近代文体形成資料集成 発生編』平文社
 （1982）『近代文体発生の史的研究』 岩波書店 5-9頁
 吉原ゆかり（1998）「聖書日本語訳」『現代思想』 4月号
 松山高吉（1926）「聖書和訳について」『植村正久と其の時代』第四卷所収
 教文館
 杉本つとむ（1985）『日本英語文化史の研究』八坂書店 362頁

要 旨

聖書をそれぞれの民族語に翻訳することは、その民族語（国家語）の形成に多かれ少なかれ影響を与える。具体的に言うと、大きく分けて近代文体と近代語彙へ及ぼす影響である。

近代文体と聖書の日本語訳の場合、近代文体の発生期に行われた「明治元訳」は、文体としては「不用意の攻名」と批判されたが、句読点など近代文体の要素を先駆的に採用し、日本語の近代文体への可能性を見出した。「大正改訳」も国定教科書などを通して口語体が社会全般に広がる時期に行われたが、聖書は口語訳ではなく文語訳となった。「だれでも読めるような日本語の日本語」を謳いながら文語体となったのは、当時なお口語体は文章に力がなく、軽薄で気品がないという言語観による結果であろう。

しかしこの文語訳は多くの人に愛誦されることで、聖書の日本語として「普遍」の地位を得たと言える。たとえば「明日のことを思い煩うな」、「目より鱗」、「狭き門」などは「大正改訳」による一文で、もちろん文語体だが、何の違和感もなく、民衆の言葉となり、教会を越えて普通の「日本語」として機能を果たしている。その意味において日本語の近代文体の成立と聖書翻訳の関係は、ドイツなど他国の例とは異なるが、それぞれの時代に構想された「日本語の日本語」の文学作品として評価できよう。

近代語彙に関しては、キリスト教用語に限っていうと、「明治元訳」において漢訳から翻訳された訳語が多く受け継がれ、「大正改訳」でほぼ定着する。「愛」、「神」、「聖霊」、「福音」など観念性の高い言葉は、聖書翻訳を通して、「日本語」の世界に編入され、さらに「日本語」の意味内容を拡大したのである。

キーワード： 聖書翻訳、日本語、日本文、構想、文語体、口語体、近代文体、近代語彙

투 고 : 2008. 2. 29
1차 심사 : 2008. 3. 15
2차 심사 : 2008. 3. 29

住 所 : (300 - 766) 대전시 동구 용전동 신동아아파트 5동 705호

電 話 : 042-345-5154 / 010-3146-1933

e-mail : hjini117@hanmail.net